

第9回

博報教育フォーラム

レポート Hakuho Education
Forum Report 2012



テーマ：共



博報教育フォーラムは

優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

博報教育フォーラムプログラム

1 基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などをしていきます。



2 事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例をフォーラムのテーマに沿って発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、毎年のキーワードをもとに、別の観点から眺めるとどうなるか？魅力的な教育モデルだけでなく、子どもたちへの教育実践者の熱意が伝わってきます。



3 ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。基調講演、事例発表の後、展示されたポスター、子どもたちの作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する、参加者と発表者、参加者同士のネットワークづくりの場です。



4 パネルディスカッション

フォーラム出演者全員が登壇し、子どもたちのために今、何が必要かを問いかね、新たなビジョンを提案していきます。基調講演、事例発表、ポスターセッションでの交流を踏まえ、会場全体が積極的に関与する「生きたパネルディスカッション」です。実践者の知見を生声でお届けします。





第9回博報教育フォーラム

テーマ：「共」(きょう)

東 日本大震災は、私たち日本人に多くの課題を投げかけました。人間が自然を破壊してまでも作り上げてきた技術や物の脆さを目前につきつけられ、私たちは長年しみついた「物・金中心、効率重視、自己中心」のあり方を自分ごととして見直す機会を与えられました。被災地の人々の心を救った「人とのふれあい」「ボランティアの存在」、また海外メディアで報じられた日本人の精神性などをヒントに、これからの時代を生きていく子どもたちに伝えていく価値観として、様々な「共」(きょう)というあり方を考えてみたいと思います。

第9回博報教育フォーラム「基調講演」ダイジェスト

「共 ーとともに生きるー」

押谷 由夫 昭和女子大学大学院 教授

第9回のテーマ「共」を掘り下げ、「人間存在の本質」「『共』を考える3つの軸」「『共』によるコミュニティづくり」をキーワードに、昭和女子大学大学院・押谷由夫教授がわかりやすくお話しくださいました。

共に生きる学びへ

皆さん、こんにちは。東日本大震災から1年が経とうとしています。大変な惨事において私たちは大きな悲しみを味わった、あるいは味わっているわけがあります。このことに、私たちはどう対応すればいいのか。やはり震災を一つの糧として、新しい日本、あるいは新しい教育をつくっていくことへ発展させる必要があります。

世界的に先進国と言われている国は成熟社会になっているわけで、その成熟社会の中でこれからどう生きていけばいいのか、国をどういう方向へと発展させていけばいいのか、みんな悩んでいる。日本全体が東日本大震災を自分たちの課題として捉え共にここから立ち上がっていかうという姿勢、そういったものが、まさに世界のこれからの国づくり、あるいは人づくりに貢献していけるのではないかと考えるところであります。

人間存在の本質とは

震災以前からも、人間存在の

本質から考えて、「共（ともに）」が重視されていました。人間は本来、自己中心的であります。生き物はすべて「自分を守る」ということが基本になります。どの生物も、「固体保持」と「種の保存」、つまり子孫を残し育てていくという2つを遺伝子に持っています。しかし一方で人間はひとりでは生きられません。支えがあってしか生きられない。そのことを忘れている現状もあるわけです。

私たちは自己中心主義、あるいは自分が生きている主体性を維持しながら、「共（ともに）生きる」生き方をみんなで追いかけていかなければいけない。それが人間の宿命でもあるということです。

現在の社会は、「自己愛偏重社会」と言われています。今の社会、経済界の動きは、「一人ひとりのニーズ（わがままも含めて）を満たしていく」、そういう需要に応える製品やサービスを出していく。経済論的、倫理的にも、ひとりで生活することを便利にする社会になっています。

成熟社会は「個性（only one）を尊重する社会」でもあります。一人ひとりを大切にするという



押谷 由夫教授プロフィール

昭和女子大学大学院教授、放送大学大学院客員教授。『自ら学ぶ道德教育』（編著・保育出版社）、『道徳性形成・徳育論』（編著・NHK出版）他、著書多数。

ことは良いことですが、度が過ぎると、わがまま、自分勝手が助長されることになっていきます。人間の持つ自己中心的側面を助長するような社会になってきています。科学技術、経済、政治、教育などがそのことを加速させていると思います。そのことへの反省が、今、同時に起こってきていると思うのです。

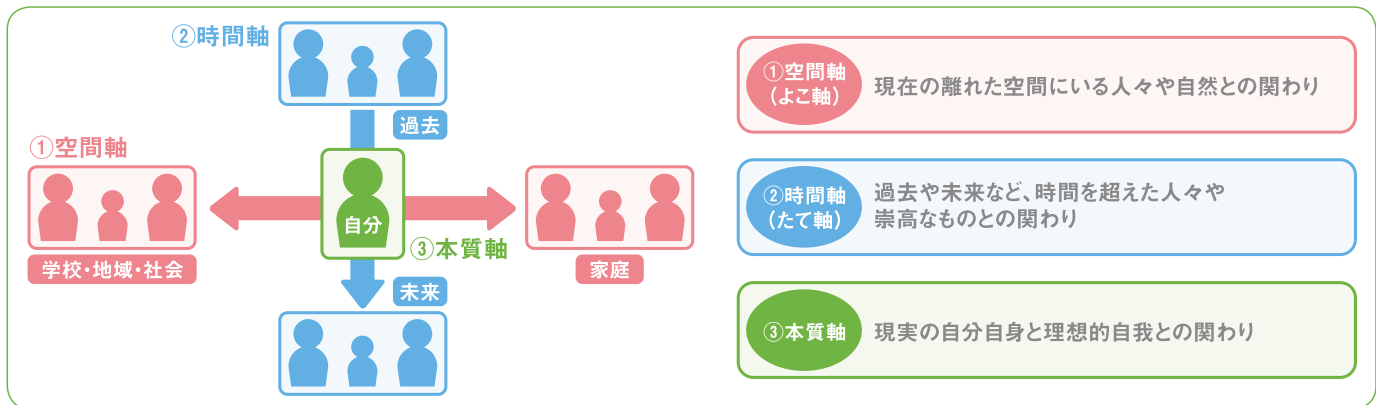
「共」の3つの軸

「共（ともに）」を考えるには、自分と関わる「誰か」、つまり「対象」が必要です。パートナーですね。それには3つの軸があります（P5.図1参照）。

一番目は「空間軸」。私たちは今、いろいろな関わりの中で生きていますね。家族や近所の人々。学校では子どもと先生。私たちは自然の中でも生きています。あるいは崇高な対象を思い描きながら、コミュニケーションを交わす。

2番目は「時間軸」。私たちは過去の人々がつくってくれた文化、昔からの自然と関わって存在するわけです。未来の人々とも関わりを持つ。それらにおいて「共」に生きることを考えます。

図 1. 「共」を考える 3つの軸



最も大切なのは3番目の「本質軸」です。対象は「自分自身」、つまり「理想自我的な自己」を磨き対話を深めるということです。いろいろな対象と関わるには、「どんな関わりを持てばいいんだろう」と、自分自身のあり方も考えてみなくてははいけない。現実のこの自我、自分というものと、理想的な自我というものを思い描きながら、それとのコミュニケーションを深めていけることが必要だと思います。いろいろな対象と豊かに関わることを通して、理想的な自我が現実的なものになっていくし、自分自身との関わりもより深められるのではないのでしょうか。

「共」の教育と実践

以上のことを踏まえ、「共」の教育のポイントを述べてみます。1番目は「関わり、交わる」です。直接体験として、空間軸の中の家族、学校、地域の人々と関わる。つまり、集団、社会、自然や崇高なものとの関わる体験を行う。また間接体験によって時間軸の過去や未来とも関わるができます。

2番目は「対話をし、心を通

わす」。意図的に相手の立場に立ってみると、相手の良さが見えてきて、自分の自己主義的な思考にも反省を加えることができます。さらに3番目に「違いを認め、受け入れる」。人はそれぞれ持ち味や特徴を持っています。その持ち味や特徴には、自分にはないものや、学びたいと思うものがたくさんあります。つまり、それを受け入れることで、自分が豊かになるわけです。4番目は「共通性を求め、共有する」。ある課題を共有できるようになると、感情、価値意識というものも自然と共有されてくる。そうしたものが、文化として受け継がれていくのではないのでしょうか。5番目に「支え合い、認め合い、共に幸福な人生と社会を目指して生きていく」。私たちは関わりを通してしか生きられないし、私たちは先人たちの想い、願い、知恵に支えられて生きています。先人に感謝し想いに応えられる生き方をする。未来とも対話し希望を持てば、人生も社会も開けていくはずです。

根っことしての「共」

昨今、学校をコミュニティーづくりの核にしていこうということが言われます。それには、子どもと大人が学校や家庭をしっかりと心に刻んでいける、そして人生の拠り所としていける心を育てていくことが大切です。例えば学校を「私のもうひとつの家である」、地域を「私のもうひとつの庭である」という意識を持たせたい。

「共に生きるコミュニティーづくり」のもうひとつの核として、「社会教育施設」を位置づけたい。文化・研究施設やボランティア組織など、地域住民が家庭や学校と連携してコミュニティーを形成します。子どもと大人の意識が随分変わるはずですが、自分の根っこが育ち、関わりも豊かになります。コミュニティーの過去・現在・未来を考え、一人ひとりが「自分のあり方」をしっかりと見つめられるようにする。生活の中で課題に取り組んで、みんなと共有化していける。それは、家庭や学校、郷土の生活の中で「共」の根っこを育むことになります。それが「共（ともに）」によるコミュニティーづくりだと思います。

第9回博報教育フォーラム「事例発表」より

Case.1



セクターを越えた不登校支援と協働の枠組み

ー地域社会と共に歩む教育へのチャレンジャーー

宮城県 仙台市不登校支援ネットワーク 針生 英一 代表

セクターを越えた協働組織の確立

仙台市は平成14年、専門スタッフが不登校の児童・生徒を支援する適応指導センターを設立。さらに、NPO・企業・大学などが行政と連携しながら支援活動を行う「不登校支援ネットワーク」が、平成16年に設立された。同ネットワークは今年で9年目を迎える。

仙台市の小中学校には約1,000人の不登校の子どもたちがいる。しかし、針生代表は「行政や学校の力だけで不登校の問題を解決するのは非常に困難」と考え、企業10社と9つの市民活動団体、宮城教育大学など2つの大学と170名の教師が加盟するボランティア組織「ハートフルサポーター」などが、各々の特性や資源を活かし合い、セ

クターを越えて協働する仕組みをつくった。以後、今までにない「共」の支援を試みている。

NPO・企業・学校の連携で多様な教育支援

生涯学習施設・大倉ふるさとセンターでの自然体験活動は、春夏秋冬、引きこもりがちな子どもを豊かな自然に連れ出す。コミュニケーションが苦手な子どものために動物介在教育も実施。生命と触れ合うことで子どもの中に「居場所」をつくる。パソコン教室は、IT企業がハードとソフトを無償提供。IT関連ボランティア団体が教室の運営に当たる。

携帯電話会社、テニスクラブ、高齢者配食サービス企業などが社会貢献の一環として職場体験・職場見学に協力。普通校、

定時制、通信教育など26校の高校が参加する進学・進路相談会は毎年ニーズが高い。保護者を労う芸術観賞会も開催。針生代表は不登校児童・生徒への社会の理解を促す。

職場体験が育んだ不登校の子の「自信」

針生代表が経営する印刷会社も職場体験を受け入れている。数年前、絵を描くのが好きな中学2年生の生徒が来た。3日間の職場体験ではプロの女性デザイナーが指導し、パソコンでイラストを3、4点描かせた。そのイラストが上手い。針生代表は教育関係のイラストの仕事その生徒に依頼。「実際の仕事は責任もあるが、やりがいもあり、子どもにとって大変自信になった」と、針生代表は感じている。

海外では、「子どもは生まれた時から社会人」だと言われる。針生代表も、「子どもが小さい時から本当に社会と関わり、多様な大人たちと出会って体験を積むことが大切」と考え、そういった学びを教育や行政だけでなく、社会全体でサポートする、「共」の教育支援を呼びかけた。



職場体験がきっかけで、
実際の仕事になった中2生徒のイラスト。



Case.2



青年会と小中学校が共に 守り伝える村の心と文化

新潟県 弥彦小学校・弥彦中学校・彌彦神社氏子青年会 村越 隆典 代表

歴史ある神事を通じ 地域と学校が一体に

新潟県西蒲原郡弥彦村は、古くから彌彦神社の門前村として栄えてきた。毎年7月25日の夜に行われる彌彦燈籠神事の夏祭りは、約1,000年前の平安時代末期頃から伝えられ、国の重要無形民俗文化財に指定。弥彦小学校4～6年生の児童、弥彦中学校1～3年生の生徒、氏子青年会が一体となって「青年児童燈籠押し」に参加する。

弥彦小・中学校は総合学習に「弥彦学」を位置付け、小学校3年生から中学校3年生まで、継続的に弥彦に関わる学習を行っている。「聞く活動、見る活動、伝える活動、体験する活動」を

重視した「弥彦学」により、ふるさと「弥彦」を学ぶ。「青年児童燈籠押し」は、小中学校が共に取り組み、児童生徒、保護者が「弥彦」を体感できる代表的な行事になっている。

子どもと大人と一緒に 郷土の文化を守り継ぐ

小学校3年生では「弥彦のお宝」を調査。「弥彦お宝マップ」にまとめ、観光客にグループごとにガイドする。4年生からは総合学習で「弥彦村の伝統と芸能」を学習。郷土に誇りを持ち、愛する心を培う。祭りの準備としては、氏子青年会が花燈籠の担ぎ方、迫力ある押し合いを伝授。燈籠を飾るサクラ、ユリ、アヤメの紙花も保護者と共に制作。サクラは数も多く、制作も3月かかるが、最後は神前で華やかに展示される。

神社まで重い花燈籠を担いでいく時の掛け声、「木遣り」も習う。児童と保護者、地域が力を合わせ、心をひとつにすることで、小学生の花燈籠と心の準備が完了する。中学生は酒樽を太鼓の代わりにした樽太鼓と横笛を体得。「鳴り物組」として祭りをはやし立てる。



▲保護者と共に「花作り」に励む小学生。

効率重視ではなく 伝統を丁寧につなぐ

祭り当日は小学生4基、中学生5基、養護施設1基の子ども燈籠、2基の子ども神輿が勢揃いする。威勢の良い木遣りと花燈籠を押し合う光景は、子ども燈籠、子ども神輿といえども勇壮の一言に尽きる。祭りの後も、中学校3年生は「ふるさとキャラバン」とし、大型商業施設などで木遣りや鳴り物をにぎやかに奏で、堂々と弥彦を紹介する。

「祭りは、普段は関わりのない多様な人々との出会いと、つながりを生む」と村越代表は言う。故郷とその歴史に興味を持ち、地域から認められることで、故郷と自分に自信を持つことができる。村越代表も小中学校で祭りを体験、「祭りを教えられていた人間が、教える立場になった」。効率重視で簡略化が進む世の中で、「変わらないことの難しさ、大切さを伝えたい」と、子どもと大人と地域による「共」の学びへの意欲を語った。



▲伝統を体感する中学生の「燈籠押し」

Case.3



支えあいの暮らしから学ぶ、共に生きる力

長野県 NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 辻 英之 代表理事

教育を中心に山村を蘇らせる

長野県の南部にある泰阜（やすおか）村。人口1,900人、国道も信号もない山深い過疎の村。歴史的に見ても、泰阜村は豊かだったとは言えない。米で年貢を納めることができず、山の木を伐採して年貢に充てた貧しい山村だった。

そこに25年前、「違いを認め合い、支え合いつつ、自発的に責任ある行動をとることができる人づくり」を目指し山村留学を始めた。現在は村内第3位の事業規模を持ち、「教育をど真ん中に置いた持続可能な村づくり」に挑んでいる。



▲来年の子どもたちのために薪を割る

村の暮らしを活かした教育実践

中心となる山村留学、暮らしの学校「だいだらぼっち」では、1年間子どもを預かり、大家族の暮らしをする。子どもたちは村の小中学校へ通いながら、食事をつくり、五右衛門風呂を沸かし、掃除や洗濯など、生活の一切を手がける。暮らしの困り事は多数決を用いず、時間と手間がかかっても納得のいくまで話し合って解決する。

ストーブや風呂の燃料は薪。子どもが里山に入り、村の“おじいマ”“おばあマ”と一緒に間伐作業をして薪を取る。薪割りも子どもたちの仕事。田や畑で米や野菜を育て、手づくりの木のテーブルと椅子、登り窯で焼いた器でご飯を食べる。今年は16人が参加。そのうち3人が、福島、千葉から来た東日本大震災の被災児童。阪神大震災、中越地震でも被災児童を3年間受け入れてきた。25年間で輩出した子どもは40人。毎夏の「信州こども山賊キャンプ」は、1,100人の子どもとボランティア350人が集い、食事は泰阜村の農家が作った米と野菜で賄う。



▲生活食器の一部も自分たちでつくる。

お互い様、支え合い村の文化を伝える

谷と川に囲まれ、物資の乏しい泰阜村では共助の文化が育まれた。村民は今も道路整備を手分けして行い、子どもも「お互い様」として例外なく働く。山に入れなくなったお年寄りに代わり、大人と子どもが伐採する。自分たちだけでなく、来年の子どもに分まで薪を準備する。辻代表は「子どもは顔の見えない誰かのために、自分の労力を使うセンスを養う」と語る。

子どもが学ぶことで高齢化した村が助かり、村人は生きがいを得て喜び、山も喜ぶ。大人たちは忘れかけていた泰阜村の文化と価値を再評価する。今ではPTA、役場職員、青年団などが手をつなぎ、「あんじゃねえ支援学校」(*)を開催。毎回ほぼ全員が出席し、村の未来を熱く語り合っている。

※「あんじゃねえ」：「案ずることはない」という南信州の方言。「大丈夫だ、安心しろ」という意味。

第9回博報教育フォーラム「ポスターセッション」より

ポスターセッション風景

Case.1 セクターを越えた不登校支援と協働の枠組み



◀ 不登校支援ネットワークのパンフレット。フランス料理店や保育所での職場体験、進学相談会、パソコン実習など多様な支援を事業化している。

Q ボランタリーな仕事には、なかなか人が集まらないのですが…。

A 発想をどう転換していくかが大切です。例えば町内会の新聞を作るにも、役員が嫌々するのは続かない。取材や編集、フリーペーパーづくりという視点で公募すると、興味がある人が集まりやすくなります。

Case.2 青年会と小中学校が共に守り伝える村の心と文化



◀ 弥彦小学校3年生の「弥彦村お宝マップ」。ふるさとの「宝」に自然に誇りを抱く。



◀ 花燈籠を飾るサクラ、ユリ、アヤメの紙花。子どもも大人も先輩から教わりながら、3カ月かけて自分たちの手でつくりあげる。これも大切な「伝統」の継承。

Q お祭りは宗教色が強いのでは、といった意見が父兄からありませんか？

A 弥彦村は古くから彌彦神社の門前町として栄えてきたので、父兄からはそういった意見は出ませんでした。小中学生は燈籠祭りを、神事というより、地域文化として捉えていると思います。



Case.3 支えあいの暮らしから学ぶ、共に生きる力



▲ 25年に亘るグリーンウッドの教育活動について書かれた、辻氏の著書。



▲ 山村留学「暮らしの学校 だいらぼっち」で子どもたちが日常使っている食器。週二回のものづくり教室では自分たちの使う食器や椅子も手づくりする。

Q 村おこしなどで、普段は交流のない者同士が「つながる」関係を築くポイントは？

A 共感を得るテーマ設定が大事です。泰阜村の場合、子どもの教育なら文句を言わずにみんな来ます。地域に眠る「これだ！」という共通項をみんなで見つけるといいと思います。

第9回博報教育フォーラム「パネルディスカッション」より

「共」の新しい学び、新しい社会を求めて

「共」の学びとは何か。「パネルディスカッション」では、東日本大震災以後の学びの価値観を求め、出演者と会場が豊かな100分間を共有しました。



「公」と「私」の溝を越えて

嶋野（コーディネーター）

これから、3・11以後の新しい学びの価値観として、「共」をテーマに考えていければと思います。皆さんのお手元には、三陸から届いたミサンガがありますね。私のには「16,516 番目につくりました」と書いてあります。これは16,516個の内のかけがえのない1個、「個」。同時に16,516の仲間がいる1で、「共（ともに）」でもあります。「共」と「個」、「自己」と「他」。そう考えて、いいプレゼントをもらったなあと思います。

さて、3つの事例発表がありました。各々どういう「共」の特色がありましたか。

針生 ポスターセッションで、「企業が学校に入るのは非常に珍しい」と何人かの方に言われました。我々も最初、「学校は入りづらい」と感じました。その中で、現場の先生方と知恵を出



し合うと、新しい発想が生まれ、新しい人脈ができる。今までと違うことができる。その体験から、「共」の考え方が共有できると、発展につながる事が分かります。それに対し、セクターは「公」（行政）と「私」（個人）を分けます。この間の溝をどうするか。「公」と「私」は今までバラバラでやってきました。それでは不登校を解決できない。今、そういう複合化した社会的課題が非常に大きくなっています。溝を埋めるために、「公」と「私」が互いの領域をはみ出して近づく。はみ出した部分が重なり合う。それが「協働」だと思います。（P11 図参照）

嶋野 「公」と「私」の溝をどうするか。「セクターを越えた多様な人との関わり」がポイントになりそうですね。弥彦はどうですか。

清野 1つ目は願いの「共有」。小学校、中学校の願い、それから地域、氏子青年会の願いが合致したということです。そして、「共同」。共に祭りを盛り上げていく。それから「共感」。祭りをやり遂げて、共に「やっ

たーっ！」という充実感を味わう。重要なのは、「共学」。転勤で来られた小中学校の教師は、弥彦について知らないわけです。子どものほうがよく知っている。生徒と教師が共に学び合います。地域の方々から教師が学ぶ、子どもたちが地域の方々から学ぶ、そういう「共学」。この4つの「共」が弥彦の事例に含まれていると思います。

辻 「共」を特徴づける言葉で「お互い様」と書きました。でも、非常に困難な地域の村の人たちから見ると、「力を合わせざるを得なかった」わけです。そうしなければ生き抜けなかった。少し消極的な意味の「お互い様」、「共」という気がします。これを積極的な「お互い様」、「共」に変えていく。今回の震災支援も、村の皆さんが自発的に手を差し伸べた。その方が豊かな関係性や暮らしを築ける自発的な「お互い様」だったと思います。私が風邪をひいた時、村のおばあちゃんが「かりん漬」を持ってきてくれます。でも、そのお返しは「お金」じゃない。相手の人の背景にも思いを巡らして必要そうなお返しを考える。そんな「お互い様」を、子どもに教えたいですね。

パネリスト



押谷 由夫
昭和女子大学大学院 教授



針生 英一
宮城県 仙台市不登校支援ネットワーク 代表



清野 博
新潟県 弥彦村教育委員会 管理指導主事



辻 英之
長野県 NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事

コーディネーター



嶋野 道弘
文教大学教育学部・大学院 教授

2005 年より文教大学教育学部心理教育課程・大学院教育学研究科教授に就任。文部科学省初等中等教育局視学官・主任視学官などを歴任。主著に『教育の精神と形』（教育報道出版社）、『これからの生活・総合』（共著東洋館出版）など多数。

想いと願いの共有から始める

嶋野 「共」というのは、「みんな仲良く」なんてことではないらしい。もっと深い、強いものがありそうです。会場から針生さんへの質問で、「活動^{あつれき}を続ける中で、学校との軋轢^{あつれき}はなかったか」というのがあります。針生さん、皆さん、いかがですか。

針生 ありました。当然、教育委員会ともありました。経済産業省の事業を受託して「キャリア教育」を学校に持ち込んだ時です。「キャリア教育って何だ？子どもに金儲け^{かんむり}を教えるのか？」が最初の反応でした。学校現場には冠教育で、「〇〇教育」が、いっぱい落ちてきます。

嶋野 「冠教育」ね（笑）。

針生 先生方も消化不良で、「もう勘弁してくれ」と。「ゆとり教育」の時代で、「時間数も足りないし、付き合っていられない」というのが本音でした。そこで、



「なぜ必要なのか」を先生方とじっくりと話し合い、我々も学校のことをよく理解する。企業の論理、外の論理だけだと反発しかないの、やはり同じ土俵に立って、膝を付き合わせてやっていく。すると、先生方も心を開いてきて、「そういうことなら一緒にやりましょう」と。お互いのコンセプトが共有できると、すごく歩み寄れますが、そこまではかなり時間がかかります。

辻 ほとんど軋轢^{あつれき}だらけでした。25 年前は単に「ヨソ者」でした。今は非常に良い関係ですが、最初いきなり共同ありきだと、とても苦しいですね。お互いに連携したほうが豊かになるということが実感できれば、つながるんでしょうけど。そこで、まず、「共に考える」ことが必要です。私たち自身が学校のことをきちんと理解しお互いに歩み寄る。丁寧なプロセスを省いて一気にゴールに行く道はない。それが「共有」なのかなと思います。

清野 学校現場にいる時には、他所からいろいろ持ち込まれると、ちょっと迷惑なんですよ（笑）。平成 17 年に弥彦の氏子青

年会からの申し出で花燈籠の活動をした時、私は弥彦小学校の校長をしていました。私たちは総合の学習を何とかしたい、地域から力を借りたいと思っていました。小中学校の 9 年間で、子どもたちに地域学を学習させていきたいという願いがあって、それには、必ず地域の協力が必要ですね。かといって、誰も手を挙げてくれない。ですから、氏子青年会の申し出は願ったり叶ったりでした。氏子青年会の願いと、私たち学校の願いが合致したんです。

押谷 「公」と「私」をつなぐには、どうつなぐかというのが大きな課題になってくる。そのつなげ方が、針生さんの場合には、ボランティアなどで、セクターに拠らない形でつなぐ役割を果たしていく。弥彦の取り組みは、まさに地域の伝統でつなぐ。辻さんのところは、外からの刺激を通してつなぐわけですよね。その時のポイントは、両サイドからの願い、「想いの共有」でしょうかね。お互いの話し合いを通して、互いの想いを共有し、実行してみる。実行することで共感や共生ができて、歯車が上手く噛み合って進むのかなと。



他者と豊かにつながるために

嶋野 では、「共」がもたらすものの、成果って何でしょうね。

辻 「えっ？」と思うかもしれませんが、学力が上がると思いました。それは従来の学力という視点ではありません。子どもたちが培った読み・書き・ソロバン、運動能力…学力や体力は誰のために、何のために使うんだということだと思います。自分のために使う学力、体力ではなくて、他の人のため、世のために使う学力、体力が上がっていく。山村留学の例ですが、何十人も入る五右衛門風呂は最初のうち3時間もかけて支度します。ボタン1個ではできません。次の人のために使った分だけ水を足し、また薪を入れるので、手間がかかる。今は1時間以内でたけます。燃やす技術がついただけでなく、次の人のために湯をたす「思いやり」が入っています。4



月に土いじりが嫌いな子どもが、秋の稲刈では率先して、泥だらけで落ち穂拾いをする。水稻技術を学んだだけではなく、仲間の暮らしをきちんと考えて行動を起こしています。今の子どもたちは暮らしの中で「時間」「空間」「仲間」の「三間」が乏しいですね。私はこれに「手間」を加えて、「サンマよりヨンマ」、「他者との関係を豊かにする学力」と言っています。これには「共」という視点が必要です。「誰かのために」と、共にきちんと考えていく相手がいてできる。押谷先生のおっしゃる通りです。

針生 私は3つ考えてみました。1つは「人材の育成と発掘」です。特に地方都市の場合、人材がないという問題にぶつかります。中核になって汗を流してくれる人がなかなかいない。「共」という概念に立てば、他人まかせではなくて、自分たちの課題は自分たちで解決しようという動きがでる。地域にどんな人材が集積して、ネットワークが構築されているかが、地域づくりを左右します。縦割り主義からの脱皮が大きなテーマになって

きます。2つ目は、「事業化」。ボランタリーな活動だけではなく、「ソーシャル・ビジネス」がずいぶん言われ始めております。地域の課題を解決するため、企業のノウハウもつぎ込む。NPOと企業が融合した形というか、地域の課題を事業的な手法で解決する動きが広がりだしています。3つ目が、「地域経営」。「この地域をどうやって経営するか」という大きな視点で考える人が育ってくる。自分のテリトリーだけではなくて、いろいろな資源をつないで活性化する。教育だけではなく、産業も福祉も全部からまないと解決できない課題が相当あると思います。

清野 小さな村ですので、豊富な人材というわけにはいかない。弥彦では学校が必要なことをとにかく地域に発信しています。「学校はこういうことを助けてほしい。一緒にやりませんか」と。「菊祭り」という大々的なお祭りで、子どもたちは菊づくりをして出品します。作って飾るだけではなく、子どもたちが「ここを頑張りました」とメッセージを付けます。お手伝いは無報酬です。でも、喜んでやってくれますね。

明日を担う子どもたちに贈る。「共」で得た、パネリストたちのキーワード。



人間の本質を育む学び

嶋野 今のお話、まさに「動いている」感じがしますね。

押谷 「3つの軸」のお話をしましたが、各々の成果を見ますと、時間軸と空間軸で自分の存在に意識を向けていく。そして、全てが本質軸に向いていった時に、学力の向上や誇りが育成されてくると思います。関わりを豊かにする中で、子どもがどう関わり、何を感じ、考えるのか。本質軸において、子どもがどう育つのかをしっかりと押さえると、よい結果が生まれる。人材育成のお話もありましたが、今までの日本は「技」、「ものづくり」を頑張ってきました。ものづくりの根本は器用さだと思います。手を使う。辻さんの言う「手間」もそうですね。私は「手の巧緻性」を高めていく地域内の活動がいいと思います。学力を育てるのは大切ですが、それ

をどう使うの？どんな生き方につなげていくの？という、舞台が見えてこないといけませんよね。そういったものを体験活動はしっかり見えるようにします。ですから、もう少し手間をかけ、手を使ってつくっていく。「売っていく」ということがあってもいいと思います。やりがいを持ち、技術を磨いていく。そこに想いも、思考力、判断力も含めながら大切です。

嶋野 辻さんの、「サンマよりヨソマ」という話もありましたよね。

押谷 手間をかけることで、心がつながってきますよね。

嶋野 共有や共感も時間をかけなければ生まれてこないということでしょうね。

針生 私は、辻さんのところみたいで、「ヨソ者」が入っていくということがすごく大事だと思います。その地域にずっと住んでいると、意外と地元の良さが見えないんですよ。「こんなものは当たり前で、捨てるほどあるんだ」みたいなことがある。外から来た人が「あ、これっていいんじゃないの？」という



ことが、地域の中にいる人たちにはなかなか見えない。

辻 子どもたちも都会の子どもたちとの交流で自分の故郷の良さを知っていくんですね。大人が否定していた村の文化を、子どもたちはすべて肯定します。「水がきれい」「星が見える」「おじさん、すごい！」とか、「そんなものはどうでもいい」と言っていたものを、全部。戦後60年、日本は欧米に追いつけ追い越せでした。泰阜村の場合は、「都市に追いつけ、追い越せ。この村じゃダメなんだ」と教えられてきました。しかし、「この村でいいんだ」ということをおじさん、おばさんたちが知って、今、動きだしたわけです。ですが、博物館に入る技や物をずうっと伝えるだけではなくて、そこに内包された大事なものをきちんと現代風にアレンジして伝えていく。そういう人材づくりですね。





「共」の実践に向けて

嶋野 会場から質問があります。1つ目は、「町単位の教育で小学校の体験活動があっても、それが町の横とつながっていかない。そのあたりの工夫を教えてください」。

針生 いろいろな形で連携をして事業をやると、「組織対組織」だと意外とつながらないんですね。そこに「誰が」と主語が入らないといけない。誰とつながるのか。「あの組織にはこの人がいるから、つなげられる」とか、より具体的ににならないといけない。「相手方が誰か」を明確に見極めて、その人とつながっていくというところを突破口にして、「組織対組織」に徐々に広がっていくということだと思います。

嶋野 ○○校長とか、○○先生とか、こういうことですか。

針生 そうですね。地域側も、地域の誰々。「この商店街の理事

長だったら大丈夫」とかですね。

嶋野 2つ目は「現場はさまざまな課題に対応することで一杯です。大きな流れにしていくには、どうしていくのがよいでしょうか」。

清野 私も現職の頃は「ビルド・アンド・ビルド」でした。次から次へ来たものを受け入れてやっていくわけですから、限界を超えるわけです。だったら、「スクラップ・アンド・スクラップ」ぐらいの気持ちで取り組むといいと思います。ただし、全部壊してしまうのではなく、自分の学校で取り組んでいる活動があるけれども、その活動がいいかげんな活動になっていないか、これを充実させれば学校の起爆剤になる活動がないか、を見ていく。弥彦の場合は、氏子青年会に来ていただいて、一緒にやっていくということですよ。これはビルドではないんです。今までやってきたものに、外の力を少し借りる。あまり学校として負担を感じることもなく、むしろ助かっている。各学校の取り組みをもう一回見直してみて、「これが学校のこれか

らの中核になるんだ」という内容や活動を見つけて、各方面から助けを借りる作戦を立てていけばいいと思います。

嶋野 「学校現場では、実感を伴わない体験となりがちですが、真剣な学びを得る体験の工夫、アイデア等を教えていただければと思います」。

辻 事業ですと、「自分でやりたいことをやると失敗する」ということもあります。想いは強いけれども、それに傾注すると失敗する。社会が必要としていくことを事業化していくことを「ニーズ・ベース」と言います。ただ、想いを忘れるのではなく、想いを乗せて。我々の「山賊キャンプ」は、大変人気です。軽井沢、八ヶ岳、白馬、並いるライバルに勝って。それは恐らく、子どものニーズ、あるいは保護者のニーズに合致しているからだと思います。教育活動でも同じで、「体験活動のための体験活動」になっていないかチェックしてみてください。学校目標や理念に照らし合わせる。地域の子どもたちや保護者のニーズに本当に合っているかどうか、調べてみるといいのかなと思います。





人間らしく生きられる社会へ

嶋野 時間が迫ってきましたが、最後にもうひとつ質問が来ています。「東日本大震災の後の瓦礫処理が一向に進まないことに心が痛みます。言葉では『絆』と言いながらも、被災地が一番望んでいることに手を差し伸べない他地域の住民の姿に、日本人の心の荒廃を感じます」と。

針生 被災地の人間として。一般の方や学生も含め、1年間でものすごい数のボランティアの方々に現地に入っていて、物心両面の支援もいただきました。阪神・淡路大震災以来、日本人にボランティアがかなり根付いてきた証ではないか。私は善意が圧倒的に勝っていて、素晴らしい支援をいただいたと思います。

清野 弥彦村の場合は受け入れができるかどうかということは検討しているわけですね。それでも「できない」という場合もある。ただ、弥彦にも避難の方々が大量に来られました。こういう方に対しては、きちんとした受け入れと対応をして、皆さん、感謝を述べられてお帰りになり

ました。瓦礫のことだけで一概に「協力する力が非常に欠けているんじゃないか」とは言えないのではないかと思いますね。

辻 いろいろな「実感」を手にしていないんだらうなと思います。泰阜村とかグリーンウッドは、身の丈に合った支援活動をしように。それは子どもたちの教育を通した支援活動で、こちらからボランティアに行かずに、子どもを受け入れたんですね。村の人と我々が手にした実感は、「支えた」という実感です。「認めた」とか、「信じた」とか。逆も然りです。「支えられた実感」「信じてもらえた実感」が、たぶん子どもにも欠けていると思いますし、地域同士でも欠けているのではないかと思います。恐らくそれは双方向性の営みだと思います。「共」というのも、双方向にきちんと実感することが大事ですね。それをぜひ実感してもらう仕組みや場面が必要ですし、「参画した」「関わった」「自分たちで決めた」とか、いろいろな実感をみんなでつくっていききたいと思います。

嶋野 日本人の助け合いの精

神と冷静な行動は世界を驚かせましたね。ただ、今のご質問のように、安直に日本人の精神性を称賛するというのには疑問があります。でも、現実にはみんな助け合おうとしている。この「共」の裏に何が見えてきたかということ、文明化し、工業化された社会の中で、さまざまな問題が起きている。大震災を機会に、生き方や暮らしを少し悔い改める必要があると、みんなが気づきだしていると思います。「社会が変わるぞ」という予感がします。それがコミュニティづくりだったり、自分自身が自立してしっかりしていくことだったり、本来人間が人間であるために求められる、そういう社会づくりの方向に動き出しているのではないかと、いうことを強く感じてならないのです。「共」の価値観が改めて認識され、みんなの中にグーッと芽生えて、新しい共有意識として顕在化し、定着していくのではないのでしょうか。

出演者の皆さん、そして会場の参加者の皆さん、本日はありがとうございました。（拍手）

博報財団は次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を行っています。

当財団は、株式会社博報堂が教育雑誌の広告取次業として1895年に創業以来、次代を担う児童の育成を重視して教育・文化面において行ってきた数々の支援事業の精神を引き継ぎ、1970年に財団法人博報児童教育振興会として設立されました。以来、次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の支援を目的に活動を行っています。新公益法人制度の施行に伴い、公益財団法人として認定され、2011年4月、博報財団(正式名称:公益財団法人博報児童教育振興会)としてスタートしました。

博報賞 — 児童教育の最前線で優れた教育を実践している方々を顕彰します —

博報賞は、児童・生徒に対する日常の教育現場で貢献・努力されている、学校・団体・教育実践者を顕彰することを通して、児童教育の現場を活性化させ、支援することを目的としています。

フォーラム参加者の声をご紹介します

子どもたちの障がいの有無にかかわらず「日本に生まれ、日本に育ち、日本で豊かに生きていくことができる」教育のあり方を、いつも再確認します。

……………(特別支援学校 教諭)

震災後の混乱を得て、改めて教育や学び、生き方について問い直し、自分の考えを整理するよい機会が得られました。

……………(教育委員会)

「共」という概念にとっても興味を持ち、参加いたしました。単なる教育問題ではない、広く、大きく、「教育」をとらえたこのフォーラムで多くのことを学びました。

……………(小学校 教諭)

テーマが「共」ということで、学校だけではなく、地域、各個人を巻き込んだ活動、お話には感銘を受けました。自分一人では小

な存在、力でも、渦のように周囲を巻き込んでいけば、大きな力になると感じました。

……………(教諭)

学校教育のみ見ていたので、今回のパネリストの様々な立場からの視点をいただけて、より広い視野と視点をもって、学校や、クラス、地域をコーディネートしたいと思いました。

……………(教育委員会)

「共生、共育、共創」をめざすコミュニティスクールづくりに尽力してきたが今後の展開に役立つと思った。思いや願いの「共有」がまず大切な。

……………(大学院 学生)

「共」について、いろいろな面から考えてみるよい機会となりました。教育の分野で「学校と地域が共に連携する」という範囲に

とどまらない広がりがあること、周囲と共にあることで関わり合い影響し合っている姿をお話いただき、これからの社会で求めている姿が見えて来たと思います。

……………(大学 教員)

今までは、目先の教育についてばかり考えていたが、フォーラムでの話を聞いて、これからの教育理念について考える良い機会となった。またNPO、企業の方の話を聞き、教育に対する幅が広がった。

……………(小学校 教諭)

「村の教育力」「多様な人と関わる経験」といったキーワードが、今後の実践に生かせる。少子高齢化の世界で、日本で脈々と行なわれてきた営みを思い起こしてみたい。

……………(中学校 教諭)

編集後記

今回のテーマ設定にあたり、昨年の東日本大震災が、教育の場や子どもたち、そして我々大人たちにもたらした影響を除いては考えられないとの想いと、一方で、現地に居ない私たちが被災地の方々の気持ちを本当に理解できるのかという想いの間で、何度も議論を重ねました。しかし、震災を通してだからこそ、一層強く感じた「人とのふれあい」や日本人の精神性を、これからの子どもたち、教育の場に活かしていくことが大切なのではないかと、ご参加の皆様と一緒に考えたいと、「共」というテーマを設定しました。

「個」の存在が重要視されてきた昨今ですが、「自己」にばかり偏るのではなく、相手の背景に思いを

巡らせることでお互いの「個」の違いに気づき、それを認める。また、自分の考えを押し付けず、膝を付き合わせて話をする中で、お互いを理解する。そのようなことから「共」は成り立っていくことを感じ、「共」と「個」は互いがあるからこそ存在するものなのだと気づかされました。発表の実践事例の中には、様々な形の「共」があり、参加者自身もご自分の活動を振り返りながら、「共」を見出していました。

教育実践者、地域、保護者の方々に「共」について考えていただくヒントにしていきたいと思います。想いを込めて、このレポートをお届けします。

フォーラムをライブで体験しませんか? 皆様のご参加をお待ちしております。